武井博美　著
『ゴシックロマンスとその行方――建築と空間の表象』
（彩流社、2010 年 3 月、四六版、316 頁、本体 2,800 円）

市 川　　純

本書は、武井氏が 2007 年にフェリス女学院大学に提出した博士論文を書籍化したものである。

周知の通り、英文学研究におけるゴシックロマンスの批評的地位はそれほど高いわけではない。もっとも、最近は各種学会発表や論文発表などでしばしばゴシックロマンスも取り上げられてきており、この分野の再評価は行われている。ただ、それでも既存の英文学カノンを超えるほどの評価がされているかといえば、厳しいといえるだろう。このような状況に風穴を開けようと誕生した一つの試みが本書である。

ゴシックロマンスの研究自体は古くからあり、1920 年代から 30 年代にかけて、エディス・バークヘッド (Edith Birkhead) やエイノ・レイロウ (Eino Railo)、モンタギュー・サマーズ (Montague Summers) らの著作が名著の誉れ高い。最近ではついに Cambridge Companion シリーズにも、ジェロルド・E・ホウグル (Jerrold E. Hogle) 編 *Cambridge Companion to Gothic Fiction* (2002) が仲間入りした。

このように、ゴシックロマンス研究の下地は確実に整ってきてはいるのだが、そもそも「ゴシック」の語は文学ジャンルの用語以前に建築用語として存在していた。建築としてのゴシックを論じたものは数々あるが、文学と建築両者の橋渡しをするような研究はこれまであまり成されていない。この問題を積極的に取り上げ、さらにはゴシックの系譜をブロンテやジェイムズの作品にまで辿ることにより、ゴシックロマンスと既存のカノンとの間にある障壁を越えようと試みているのが本書だ。

論じられる作品を本書の順番通りに挙げると、ホレス・ウォルポールの『オトラントの城』、ウィリアム・ベックフォードの『ヴァセック』、アン・ラドクリフの『イタリア人』、M・G・ルイスの『マンク』、メ

アリ・シェリーの『フランケンシュタイン』、ジェイン・オースティンの『ノーサンガー・アビー』、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』、そして最終章ではヘンリー・ジェイムズの『ねじの回転』が取り上げられる。典型的なゴシックロマンスもあれば、そうではない、しかしそれでいてゴシック的な要素を持った小説が含まれている。そして、いずれも修道院や邸宅など、恐怖が展開される上で建築物が重要な役割を果たしている作品ばかりである。

とりわけ『オトラントの城』を論じた章は興味深い。クレアラ・リーヴが『イギリスの老男爵』の序文で、この作品を蓋然性という点において批判したように、『オトラントの城』には荒唐無稽な要素が多々あり、小説としての完成度は決して高くなく、ゴシックロマンスの幕開けを告げるものである以上の価値は認めにくい。しかし、武井氏による空間表象に着目した分析法は、この作品が持つ魅力を開示する。

『オトラントの城』の登場人物は一見「並列的」でありながら、そこには「水平方向」の動きと「垂直方向」の動きという対比構造があるという。横暴な城主マンフレッドの息子コンラッドの嫁となるはずだったイザベラは、セオドアに助けられてマンフレッドの暴虐から逃れるが、城から隣接する聖ニコラス教会への移動は水平方向の動きだ。さらに、洞窟の奥へと導かれる描写もある。これに対してマンフレッドの娘マティルダは垂直方向の動きを担い、上下の部屋の窓を通してセオドアと出会い、監禁された彼を助けるために塔を登ったり降りたりする。これら二つの動きが相互的に作用することで三次元的な大きさや広さが表現されるのだが、さらに「垂直方向の動きは、天と地を結ぶ〈聖〉なるラインというイメージ」を含み、「水平方向は、社会的なつながりを重視した〈俗〉の世界の動き」を表しているという (57)。これは重要な指摘で、ゴシック建築の高い尖塔が天を志向（指向）していることとも関係する。また、ゴシックロマンスがしばしばキリスト教的問題と深く関わっていることも考え合わせれば、上を向いた動きには自ずと宗教的問題が表れるし、対する横の動きは人間社会的なものとなるであろう。

ゴシックロマンスを論じた邦文文献はまだまだ少ない。ましてや、文学と建築との間を繋ぐ論考となれば非常に限られたものとなる。本書が

ゴシック研究の新たな地平を切り開いていくことが期待される。